夕顔瀬橋の竣功に就て

H　K　生

詩の橋・史の橋・技の橋

夕顔瀬橋は詩の橋、史の橋、技の橋の稱がある。由緒たつぷりの橋だ。落橋に祖先の苦勞を見、鄉土の發達を橋を通して見るのも面白い。又一層鄉土の認識を深めることがよりよく現代並に將來を知ることになり、國民精神作興上極めて意義の深いことを感ずるのである。皇紀は方に二千六百年、この國史的意義ある年に竣工を見るのは全市民の喜びであると同時に國家の爲めまことに慶祝に堪へない。さらば豪華な鐵橋の出來上るまでの歷史をたどつて見よう。

一、夕顔瀬橋の名稱起源

口傳に依れば前九年の役（八百八十餘年前）源賴義その子義家と共に安倍貞任を征し大軍を擧げて此に迫つたが貞任百方力竭き擬勢を張らうとして藁を以て幾百となく偶人を造り夕顔を挿んで目鼻を附け之に甲冑を纏ひて兵卒を交互に配置して抗戰した處から夕顔瀬の名稱が起つた」と。

恐らく八百年前頃は橋といふ橋がなく舟渡であつたらう。その頃その附近に兵を配備して夕顔の兵を造つたので夕顔勢が最初であつて、橋らしきものが出來るやうになり瀬もある關係から勢が瀬に轉じ夕顔瀬橋となつたのであらう。

二、夕顔瀬橋の歷史

第一期は舟渡しで恐らしは數百年續いた事であらう。

第二期は簡易土橋が出來て土橋の完成するまで凡そ二十

年間である。

簡易土橋は多分橋らしき橋の始めであつたらうと思はれる。その文獻を見るに「明歴二年九月三日の盛岡藩事務日記に、夕顔瀬御橋（中津川三橋流落の古材木）出來、今日御橋渡り初」とある。

第三期は土橋の完成より中島築造の土橋に至るまで凡そ九十年間である。文獻を調べて見ると、南部叢書に、「延寶三、四年以前は渡舟を以て交通して居り、延寶三、四年頃（約二百六十年前）土橋となる。盛岡城下北上川五内夕顔瀬、新山、二箇所先年より船渡に御座候處其の以後二十四、五年以前（延寶三、四年に當る）土橋に仕候元祿十二年御繪圖書上之節相改、變地帳に御書上被成

夕顔瀬舟渡

新山舟渡

延寶三、四年より右兩所とも土橋に相成申候」

第四期は中島築造の土橋より豪華な鐵橋に至るまで凡そ百七十年間である。

中島築造エピソード

第三期時代の土橋は洪水の節度々落橋候に付坂牛新五左衞門差圖にて中島築立、双方へ土橋掛候より橋落不申、中島を築立候に付いて明和二年九月（約百七十年前）なりと。

南部叢書卷一中盛岡砂子に依れば、往時夕顔瀬橋は奔流急激、洪水毎に落失の恐れあるを以て、明和二年九月御側役頭大向伊織の考案に據りて川の中央に中島を築き、橋架を設けたので多く落失を免れしといふ。

名案の中島は大石を以て築き、關東より此方迄に比するものなしと。

御側頭大向伊織が工夫して今の如く掛けなほ落まじと思ひしかども、公費を厭いて捨置けるを御勘定頭梅内忠左衞門是を聞いておもへらく、今少し費を厭いて此時懸けずんば終に永く成就せずして通行の患なるべしと思ひ、或時大向氏を訪ふて話此橋に及ぶ。

忠左衞門わざと大向氏よりは劣りたる橋の懸方を工夫して曰く、如此しかじかに懸けなば永く落まじと云ふ。大向

氏いや〳〵我工夫は中島を築きなば永久ならんと云ふ。

忠左衞門說破して屈せず大いに互競す。此に於いて忠左衞門が曰く、然らば足下の工夫にして懸見給ふべし。必ず落つべし。そのあとにて我工夫にて懸くべし。孰れが不落その次に勝劣をせんと云ふ。

此に於て大向氏公費を厭はず大いに夫役を興して終に成就す。これより如何程の洪水にも落つることなしと云ふ。大向氏の工夫さることながら、梅内氏の功最も稱すべしと古老の物語り也。

明暦より昭和に至つてはじめて不落の大鐵橋が完成されたのである。

三、夕顏瀨、橋渡の古事

盛岡藩事務日記に依ると「明暦二年九月三日（約二百八十年前）夕顏瀨御橋（中津川三橋流落古材木）出來今日御渡初め大宮權現、篠木權現御出候而橋の兩向より舞ひ出し三度宛舞濟盛岡六日町五右衞門子供十人內男三人女七人一腹一生渡初、五右衞門に御米五駄被下證文は御町奉行桂七郎兵衞にて瀧澤三郎右衞門に渡す、尙國統年譜に「正德五年九月夕顏瀨橋渡」と有、尙正德四年御書上に「北上川渡所上夕顏瀨廣さ四十八間、深さ七尺、本丸より十五町三十間」と有橋長さ五十四間。

四、名勝夕顏瀨橋

盛岡において風致に富む北川上の橋を求むれば明治橋と夕顏瀨橋ならんか。明治橋はたゝら山の月以て名高く夕顏瀨橋は岩手の秀峯を望んで名高い。西北に方り峯巒重疊の間巍然として雲際に聳ゆるものは岩手山である。岩手山はこの橋によつて人工と和し、騷人墨客の盛岡を描くもの必ず先づ夕顏瀨橋より岩手山を眺むるを以てす寫眞の盛岡を寫すもの必ず此處においてす。眺望佳麗で遠く岩手の秀嶺を仰ぐ、近く厨川の棚趾を望む、長江洋々として流るゝところ眞に畫圖そのものである。

五、橋に關する古人の詩歌、里謠

イ　行かふや遠近人の聲はして夕日を渡る夕顏瀨橋

ロ　鷲嶺聳波頭。頗有風光富。不堪夕照流。（壺廬上詠）

ハ　おらところの鼠は、あまりわるい鼠で、佛の油をひぬすで、したひこびにしなぐつて、あしたのまちにいくべか、けふのまちにいくべか、今日の町にいつたれば犬子にわんとほえられて、あときろり見たれば、つぎきれへエんきれめつけて、あらいやであらつて、仕立屋で仕立て、次郎坊にきせべか、太郎坊にきせべか、次郎坊にきせれば太郎坊はうらみる、京から下つた三つ兒にきせて金の足駄をはかせて、堂の前までおくつてた、堂の前に何アあけ、箱子アあけ、箱子の中に何アあけ、しつこあけ、しつこの中に何アあけ、蟲子アあけ、蟲子の名は何といふ、八幡太郎と申します。八幡太郎の御厩に、馬子何疋つながさた、三十六匹つながさた、どの馬の毛色好い、中の馬のけエらえ、油めイて、どろめイて、貝アですツたくちおいて錦のたづなをよりかけて、さんぐもんぐと、のツたれば、おちイサんにおばこ、おばあさんに手箱手箱の中から十二の雛子は、あつアむいてちよヨツちョツちよ、こツつアむいてもちよツ〳〵ちよ〳〵めきにはやされて百に米は一石、十人酒十ウひさげ。(古より傳はりしものゝ一節、堂の前の里謠)

ニ　立于夕顔瀨橋以凝眸。則眞覺一幅夫然好畫圖矣。主山卽岩手峰。遠山卽陸奥羽後諸嶺。以黃金馬埒。廚川古柵。姫神獄。鬼越山等。爲中景。以北上川及臨水古木危樓。爲前景。更加以角巾枯節。橋上兀立之吾。而巨幅完全。無復遺憾。雖董巨倪黃之筆。豈能出于此右耶。若夫液雨霏霏。四山點紅之候。尤極姿態縱橫神韻縹渺之妙。是選景者之所。以推冬初也歟。橋下多巖。激湍雷吼。白雨沛然之日遇歩。使恍乎如目睹年龍爭虎鬪山川震眩之狀。赤一奇也。(明治三十一年乃至三十四年)鹿山遺稿卷上(廿五頁)

六、夕顔瀨橋——神燈籠の由來

舊橋の中央の中州に在つた岩手山遙拜所の石燈籠二基は昭和十五年六月二十七日茅町側の橋の袂にうつし往時を偲びその地帶を小公園とすることにした。この石燈籠は慶應

二年材木町會が建立したもので、材木町から舟で北上川を夕顏瀨橋まで運びあげ、崇敬の的たる岩手山の橋上遙拜所として建てたものであつた。

七、架橋・落橋の略歷

○明暦二年七月十八日（二八五年前）
北上川夕顏瀨橋今日よりかゝる。但中津川三之御橋古材木にて架け候筈なり。御奉行野田右市助、菅藤兵衞、御徒衆共手明御同心、御小者其外御給所人人足出。

○寶暦十三年十二月。夕顏瀨橋下新島築立

○寛文十年六月三日（二七一年前）
盛岡洪水あり、中津川三橋及び夕顏瀨土橋流失す。是れ白鬚の水なり。
白鬚の老翁水上に現れたりとて之を白鬚水と唱ふ。

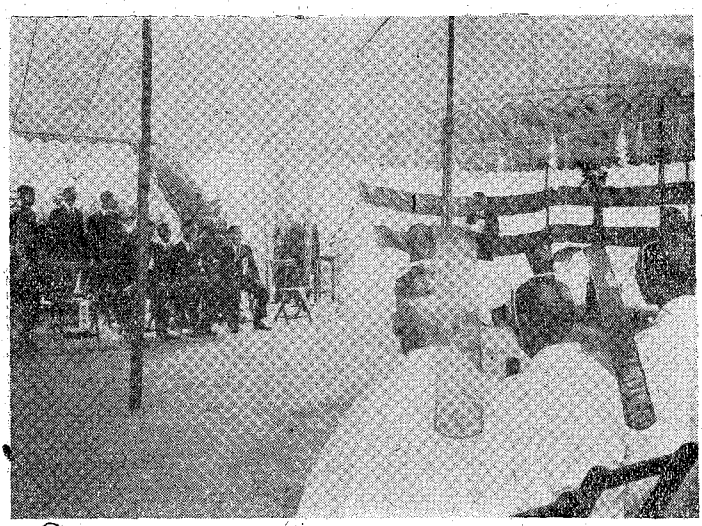
○延寶二年八月二十五日（二六七年前）
夕顏瀨土橋を架候奉行村津千右衞門栗谷川八兵衞へ申付
同年同月二十六日
雫石、繋へ夕顏瀨橋材木伐出候奉行根井澤庄兵衞被付今日差遣す。

○元祿十一年六月十二日（二四三年前）
夕顏瀨橋向の方三間落ち申候旨白濱沖右衞門申上候。往來止め申付渡舟も無之候へば罷成間敷と御町奉行上田八十右衞門披露之。幸ひ木伏に有之候御鷹野の舟借れ候樣に石井惣右衞門へ申渡す。
渡守は新山土橋之掃除仕居候三人を召すなど存候旨惣右衞門申上候。此者先年渡守仕候由に付三人替る〳〵夕顏瀨へ罷越候樣こと八十右衞門へ申渡す。

○元祿十五年閏八月朔日（二三九年前）
北上川洪水にて夕顏瀨土橋東二間落候に付往來舟渡と相成候

○享保十三年七月二十三日（二一三年前）
洪水にて新山舟橋（現明治橋）鐵鎖切れ御舟不殘流れ候由御舟奉行相坂五郎左衞門訴之。
御舟材木等流し申候御舟小屋板敷之上へ水二尺程上り申候此洪水にて夕顏瀨橋不殘流れ候段御役人共申出。

○同十四年三月七日（二一二年前）



夕顏瀨橋此間の雨、雪代にて洪水となり輪工橋損じ橋落ち候に付繕ひ普請仕候様大工御奉行共へ池田伊兵衛を以申渡す。

○元文二年七月十六日（二〇四年前）

新山舟橋、夕顏瀨橋共に今日大雨洪水にて橋落ち候段御町奉行訴之。

○明和六年九月十六日（一七二年前）

御用人大向伊織夕顏瀨橋の橋塚を築きて橋の流失を防ぐ

○安永五年七月十二日（一六五年前）

夕顏瀨土橋繕ひ材木杣取共に惣入方百二十三貫百二十文長町長吉入札安札に付御普請掛御勘定頭伺之通申渡之。

○寛政二年六月二日（一五二年前）

片原丁夕顏瀨橋より上の方北上川端石垣四間半程高さ一丈欠け崩れ候に付以前御上御普請に候や御村普請に候や先の檢斷助太郎と申者勤候節之留書先年類燒之節燒失仕相分り不申候に付御代官伺書差出候間御元締御勘定頭爲遂吟味此度は御普請被仰付以來は御様普請に被仰付旨御勘定頭へ申渡之。

○天保六年七月十七日（一〇六年前）

夕顏瀨橋中島崩れ橋の兩向ひ共流失せり。

北上川此度の大水享和元年より三尺餘高しといふ。

○明治二十九年七月一部落橋、合三十年十二月修繕成る。

當時橋の幅三間半、長さ五十四間半。

○大正三年十月一部落橋後修繕成る。

夕顔瀨橋竣功式

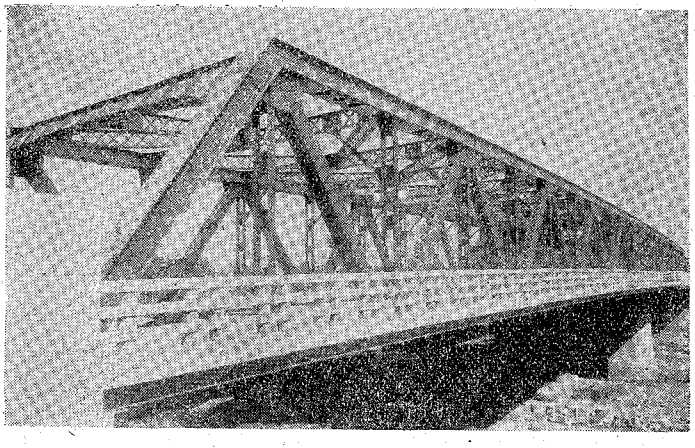
四號國道盛岡市内北上川に架設の夕顔瀨橋は昭和十二年四月内務省直轄事業として起工以來支那事變勃發のため資材統制、勞力不足等幾多の困難に遭遇したが、三ケ年半の歲月を費し此の程漸くその完成を見、十月二十一日盛大なる竣工式を擧行した。由緒深き名橋夕顔瀨橋も今近代的鐵橋となり名峰岩手山を望み當盛岡の一名所たるを失はないその工事概要は次の如し。

一、型式　ワーレン式鋼構橋

二、橋長　四八米二連　九九米五

三、幅員　一六・三四米

有效幅員　車道　一〇米　歩道各二米



四、勾配　縱横斷共六十分ノ一

拋物線

五、橋臺　扶壁式鐵筋コンクリート造

六、橋脚　鐵筋コンクリート造二基基礎井筒

七、工費　四三〇、〇〇〇圓
本工事費　三六七、五〇〇圓
土地買收　一〇、一〇〇圓
物件移轉
器具機械費
營繕費　一一、二〇〇圓

雜費　四一、二〇〇圓
八、使用材料　鐵材　六二四瓲
セメント　一七、四一五袋
砂利　一、八四八
砂　一、一六〇
九、人夫延人員　三二、二三二

埼玉縣土木課大運動會記

日東　莞爾

昭和十五年十月十三日

秋晴れだ……

土木職員の合同大運動會だ……課員二百の心は躍つた。唯も彼もがどれ程今日の日を待望して居た事であらう。

埼玉縣土木課は本年九月緒方新土木課長を迎へた。スポーツマンであり且家族主義を職場に顯現して和衷協同一心となつて滅私奉公の誠をつくさんとする同課長の信念は豫て胎動してゐた懇親會開催の機運を速進して懇親と體位向上を主眼とする全土木職員の大運動會の實現となつた。時恰も光輝ある建國二千六百年紀念の年に當り殊に本日は新